様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月２０日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００７～２００８
課題番号：１９７９１７４１
研究課題名（和文）　予防を重視した育児支援におけるヘルスニーズアセスメント指標の解明

研究課題名（英文）　Clarification of Health needs assessment index in child care support that values prevention

研究代表者
氏　名（ローマ字）：岩瀬　靖子　　（IWASE　SEIKO）
所属機関・部局・職：千葉大学・看護学部・助教
研　究　者　番　号：２０４３１７３６

研究成果の概要：
本研究の目的は、行政に所属する保健師の実践活動を調査し、予防を重視した育児支援におけるヘルスニーズアセスメント指標を解明することである。継続的な育児支援における保健師の取り組み事例を対象とし、支援プロセスにおけるヘルスニーズアセスメント内容、育児支援内容、予防的な意義の評価について分析し、予防を重視した育児支援におけるヘルスニーズアセスメント指標を検討した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	７００，０００	０	７００，０００
２００８年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
年度			
年度			
年度			
総　計	１，２００，０００	１５０，０００	１，３５０，０００

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・老年看護学
キーワード：予防、育児支援、ヘルスニーズ、アセスメント指標

１．研究開始当初の背景

軽度発達障害児とその家族への支援に着目した筆者自身の研究[1)]では、発達上の問題が明らかになっていない段階から、保健師が支援の必要性を見出し継続的に支援を行っていくことが、その後の子どもとその家族の主体的な育児を含めた生活の営みを可能としていたことが明らかとなった。

保健師は、問題が顕在化していない段階から、育児支援の必要な対象を判断し子どもとその家族との関係性を維持しながら、既存の事業の活用や、地域の関係者および住民の協力を得ることを通じて継続的に

支援を展開し、対象が主体的に育児を行っていくことを支援している。これらの支援は、対象の育児環境を長期・継続的に支え、さらに既存の母子保健事業の活用や見直しなどを積み重ねることで育児支援体制の充実へとつながっている。

これらの保健師の継続的な育児支援は、子どもとその家族の育児を含めた主体的な生活を支え、さらには乳幼児期のみならず学童期・思春期に向かうライフステージを見通した地域の育児支援体制をより充実させることへの基盤につながると考えられる。

特に問題が顕在化していない段階から育児支援の必要性をアセスメントすることは、子ども自身の発育発達・疾病のアセスメントのみならず、家族自身の育児力を総合的に捉えていく能力が求められる。しかしながらこれらの能力は、現段階において保健師自身の経験に依存している側面が大きいと考えられる。予防の段階からのヘルスニーズをアセスメントしていく能力の向上は、育児支援を担う保健師に求められる重要な課題であり、育児支援体制の充実のうえでも喫緊の課題であると考える。

従って、本研究の目的である予防を重視した育児支援におけるヘルスニーズアセスメント指標を追究することは、育児支援を行う保健師の能力の向上につながり、現在の育児支援体制の充実のうえで社会的意義が高いと考えられる。

２．研究の目的

本研究では、保健師が地域の潜在的な問題に対しアプローチしていく援助活動の中で特に育児支援に着目する。家族の育児力の乏しさや子どもの発達の遅れなど、明らかな問題として顕在化していないが、予防的な観点から育児支援のニーズを持った対象に対する保健師の継続支援におけるヘルスニーズのアセスメント、育児支援内容、予防的意義の評価を調査し、ヘルスニーズアセスメント指標を検討する。

３．研究の方法

経験豊かな保健師への振り返り調査による実態調査を実施し、予防を重視した育児支援における実践活動に関する実態を明らかにし、ヘルスニーズアセスメント指標を検討する。

対象の選定にあたっては、国内１事例を選定し、対象となる保健師の研究協力の同意を得たうえで、予防の段階における保健師のヘルスニーズアセスメントについて実態調査を行う。実態調査は、研究者が直接現地に出向き対象保健師に対して半構成面接による方法を用いて実施する。

（１）調査方法

①調査対象：育児支援において継続支援に取り組んだ経験のある保健師（国内1事例）

②調査方法：半構成面接による面接調査および支援記録の閲覧。

③調査項目：

ⅰ. 継続的な育児支援を必要とした対象のヘルスニーズ

ⅱ. 保健師のヘルスニーズアセスメント内容

ⅲ. 育児支援内容

ⅳ. 予防的な意義の評価

（２）分析方法

①保健師より聴取した調査内容から、援助のプロセスを時系列に整理する

②看護援助のプロセスにおける予防的意義を看護援助の成果より研究者が読み取る。

③看護援助のプロセスにおいて保健師が

どのようにヘルスニーズのアセスメントを行っていたのか整理する。

④上記③のアセスメントに関連してした要素を整理する

⑤抽出された要素を分類整理し、ヘルスニーズアセスメント指標を検討する

（３）倫理的配慮

１）研究参加の任意性の確保

研究を実施するにあたっては、研究対象である保健師および当該保健師の所属所の長、関係機関の長のそれぞれに研究の目的、方法について十分に説明を行ったうえで研究協力の同意を得た。

２）匿名性と守秘性の確保

本研究によって知り得た情報の取り扱いには十分に配慮し、研究結果の公表に関しては、個人や固有名詞など個人が特定される表現方法に留意することを約束した。

４．研究成果

１）調査対象者および援助事例の概要

調査対象者の概要を表１に示す。また、対象保健師の援助事例の概要を表２に示す。

表１．調査対象者の概要

	調査対象者
経験年数	９年
所属部署	健康管理部門
市町村の概要	人口約３万人 出生率６．２ 郊外

表２．援助事例の概要

家族構成	母、父、第１子、第２子（自閉症）
概要	第２子に自閉傾向あり、１歳６か月健診時より、援助を開始し継続的支援を行った

２）援助内容の成果における予防的な意義

調査対象者から聴取し抽出した援助内容から、予防的な意義のある成果（表３）を以下に示す。

成果から読みとった予防的な意義は、表３の大項目Ａ～Ｄに分類整理できた。

表３．成果の予防的な意義

A. 子供の成長発達に伴い生じる問題に対すること
子供の障害の問題が明確になる前から生じている母親の悩みや不安の表出
子供の成長発達の状況を専門的支援を結びつけながら母親および家族が子供の現在の成長発達の状況に気づくことができた
乳幼児期の育児面の相談だけではなく、就学面で生じると考えられる問題への対処方法を家族自身が見いだす
B. 家族の対処能力の向上に関すること
母親だけではなく父親も子供の障害について不安を感じていることを受け止め、父親の気持ちを確認することで両親の子供への理解へつながった
きょうだいが学校でいじめにあうのではないかと心配に思う母親の気持ちを受け止め、不安に思うことを整理し、家族内で今後について必要なことを話し合うことにつながった
C. 援助対象に関係する保健福祉サービスに関すること
保健福祉サービス（特に専門的支援）に対する両親の戸惑いを受け止めることや、支援に対する理解を確認していくことで、両親が支援の必要性を納得しサービスを生活に取り入れていくことにつながった
対象児に関わる関係者間で支援方針や母親および家族の意向を共有したことで、母親が安心して相談できる場が身近に増えた
D. 援助対象と地域住民との関係に関する要素
障害児を持つ親の会での交流だけではなく、もっと身近な地域で同じ悩みや不安を持つ親同士で情報交換をしたいという母親の思いを受け止め、同じように交流を持ちたいと感じていた地域の母親をつなげることで、身近に相談しあえる関係がうまれた。

３）ヘルスニーズのアセスメントに関連する要素

援助内容の成果に関連したヘルスニーズアセスメントの要素は、表４のＥ～Ｈの大項目および①～⑩の中項目に分類整理できた。

表４.ヘルスニーズのアセスメントに関連していた要素

Ｅ．対象児に関する要素	
①	問題が顕在化する前からの子供の成長発達の状況
②	子供の成長発達とともに移り変わる問題
Ｆ．母親および家族に関する要素	
③	母親および家族の子供の成長発達・障害への不安・理解の相違
④	母親および家族の対処能力
⑤	家族の関係性
⑥	対象児のきょうだいへの母親の思い
G.援助対象に関係する保健福祉サービスに関する要素	
⑦	対象が居住する自治体の保健福祉サービスの現状
⑧	保健福祉サービスに対する両親の思い・理解
⑨	母親・家族と保健福祉サービス関係者との関係性
Ｈ．援助対象と地域住民との関係に関する要素	
⑩	同じ悩みや問題を抱える身近な住民とのつながり

E.対象児に関する要素

これには、①子供の成長発達の状況（乳幼児健康診査で言葉の遅れがみられる、子供に自閉傾向がみられる）、②子供の成長発達と共に移り変わる問題（保育園の入園や就学についての悩み）、が含まれる。

Ｆ．母親および家族に関する要素

これには、③母親および家族の子供の成長発達・障害への不安・理解の相違（子供の発達に遅れに対する不安、子供の発達を促していきたいという母親の思い、療育手帳の取得に対する戸惑い等）、④母親および家族の対処能力（子供に自閉傾向があることを受け止め両親自ら専門機関に相談に出向いた、両親自ら養護学校の見学に出向く等）、⑤家族の関係性（育児面のことなど普段から父親と母親でよく話し合っていること等）、⑥対象児のきょうだいへの母親の思いが含まれる。（第１子と第２子が同じ小学校に通学すると第１子がいじめにあうのではないかという母親の心配）

G．援助対象に関係する保健福祉サービスに関する要素

これには、⑦対象が居住する自治体の保健福祉サービスの現状（自治体に療育面の相談の場がない、障害児の受け入れに対して積極的な保育園があること）、⑧保健福祉サービスに対する両親の思い・理解（専門的支援の場を利用することへの戸惑い、色々な関係者に今後も相談していきたいという母親の思い）、⑨母親・家族と、保健福祉関係者との関係性（支援関係者に気軽に相談できる関係があること）、が含まれる。

H.援助対象と地域住民との関係に関する要素

これには、⑩同じ悩みや問題を抱える身近な住民とのつながり（障害児を持つ親同士で話したいという母親の思い、就学にあたって障害児を持つ他の母親と意見交換をしたいという思い）、が含まれる。

３）ヘルスニーズアセスメント指標の検討

抽出されたヘルスニーズのアセスメントに関係していた要素から、Ｅ～Ｈの４つの視点が指標として導出された。つまり、保健師は、ヘルスニーズのアセスメントに個々の対象の状況とあわせて母親および家族の状況を常にアセスメントし、さらに地域の資源や住民の状況を連動させながら、育児支援を展開していることが確認できた。

今後は、本調査で導出された指標と看護援助の関係をさらに詳細に分析することによって、より実践に活かせる指標に精錬させていく必要があると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
　岩瀬靖子（IWASE　SEIKO）
　千葉大学・看護学研究科・助教
　研究者番号：２０４３１７３６

(2)研究分担者
　　なし

(3)連携研究者
　　なし